

# 「観る」スポーツに対応した体育館建設に関する研究

トップスポーツマネジメントコース

5013A309 大塚 泰造

研究指導教員:平田 竹男 教授

## 【 研究の背景 】

2013 年における日本のプロ野球の年間観客数はおよそ 2140 万人、Jリーグの年間観客数は約 800 万人である。それに比べバレーボール、バスケットボール、フットサルを合計したアリーナスポーツの年間観客数は約 140 万人でしかない。しかもこのうち約 80 万人はリーグ発足 9 年目のbjリーグの観客である。

バレーボールやバスケットボールは男女ともに学校での体育教育や部活動で触れる機会も多く、「する」スポーツとしては野球やサッカーよりも幅広く親しまれている。しかし、観戦経験についてはバレーボールが 23.9%、バスケットボールが 19.4%と「観る」スポーツのコンテンツとして確立されていないのが現状である。

また野球やサッカーのプロチームが特定のホームスタジアムを持つのに対し、アリーナスポーツは多目的に作られた公共の体育館を複数個所利用し興行を行っている。日本の体育館は常設の観客席数が少なく、興行を行うチームは観戦スタンドを仮設し、土足で入場できるよう養生を行い、飲食ブース等の設備を興行の都度に設営しなければならない。これらの設営は時間的にも費用的にも、興行主であるチームへ重く押し掛かっている。

今後、「観る」スポーツとしてアリーナスポーツが発展するためには観戦環境の現状把握と、観客の求める観戦環境の把握が必要であると考え、これらについての詳細は不明な点が多い。

## 【 研究の目的 】

本研究の目的は、「観る」スポーツに対応した体育館を新設する際に、常設すべき設備を明らかにすることである。

## 【 研究手法 】

本研究の目的を達成するため、以下の 4 つの研究を行った。

### ①日本の体育館における観客席の実態調査]

平成元年以降に建設された国内の公共体育館のうち、都道府県、政令指定都市、東京 23 区、中核市(人口 30 万人以上の都市)に存在する体育館の観客席数を調査し、集計、比較した。

### ②日本のアリーナスポーツ興行の実態調査]

過去 5 年間に Vリーグ、bjリーグ、JBL、WJBL、Fリーグ、ハンドボールリーグの 4 種目、6 つのリーグにおいて興行が行われた体育館を調査し、集計、比較した。

### ③会場内設備に関する重要度のアンケート調査]

琉球キングスのホーム試合観戦者を対象に、試合会場におけるロビー設備／スコアボードなど試合を楽しむための設備／座席における重点要素に関しアンケート調査を行い、単純集計の後、利用者の属性と各要素の重要度を分析した。

### ④会場内設備に関する仮設時と常設時のコスト比較]

研究③にて対象とした設備に関して、常設時のコストと仮設時のコストを、当該設備の製作・納入をしている事業者ならびに琉球キングスの会場設営担当者にインタビューを行い比較した。

## 【 結果 】

[結果①]:対象となる体育館は国内に 203 カ所存在した。そのうち 3001 席以上の観客席があるのは 26 カ所であった。全体の 59.6%にあたる 121 施設については観客席数の表記がなかった。

[結果②]:過去 5 年間に行われたアリーナスポーツの興

行数は6085試合であり、利用された体育館は452施設であった。このうち単一の種目のみで使われた体育館は318施設であり、4種目全てで興行が行われた体育館は4施設であった。1シーズンにおける1つの体育館での平均興行数は3.3試合であり、シーズン全体のホームゲームのうち22.5%が1つの体育館で開催されていた。

【結果③】:音響設備、大型スコアボード、演出用照明、飲食販売ブース、グッズ販売ブースは90%以上の観客が重要とした。授乳室、ファンクラブブース、託児所に関しては80%以上が重要とした。グッズ、ファンクラブの重要度と観戦回数には相関関係が見られた。授乳室と喫煙スペースは利用者が有意に重要と回答したが、託児所は利用の有無に関係なく重要とされた。スコアボード、音響、照明に関しては性別・年齢・競技経験に関係なく重要とされた。座席に関しては、前列の高さ、コート全体が見渡せること、足元スペースに関して90%以上の観客が重要とした。次いで、隣の人との間隔、コートの距離、材質、座席の向き、クッション性、背もたれに関して80%以上の観客が重要とした。

【結果④】:仮設で設営している設備が常設であった場合、座席については年間1340万円、スコアボードについては年間532万円、照明については373万円、音響については343万円の費用が軽減されることが分かった。スコアボードに関しては仮設時の方が常設時の13.4倍の費用が掛かっていることが分かった。

## 【 考察 】

### 【観るスポーツにおける体育館利用の現状】

常設でプロチームの興行が行える観客席を持つ体育館は全体の1割程度しかなく、チームはシーズン平均4.4カ所の体育館で興行を行っており、日本の体育館は「観る」スポーツよりも「する」スポーツを重視し建設されている現状が分かった。常設の観客スタンドなどが充実すれば、転戦の度に嵩む観客スタンド等の仮設コストの費用軽減が図れることが示唆された。興行を行う体育館を固定することで長期的な投資も積極的に行えることから、スポーツチームによる利用の固定化が進むことを期待したい。

### 【多目的体育館から複数目的アリーナへ】

1つの体育館において複数種目の興行が行われることは稀なケースであることがわかった。興行で用いられる体育館は公共施設が多く、多目的に建設されたも

の多いが、「観る」スポーツの利用者である興行主は、「する」スポーツの利用者である一般市民のように多くないため、他種目の準備はなされていても、現実には単一の種目においてでのみ利用される施設が多い。興行の利用者を見極め、多目的ではなく主目的を定めて設計されることが重要である。

### 【観戦者が観る体育館に求める要素】

座席に関するアンケート調査から、観客は試合を俯瞰して観たいという欲求と、快適に観戦を行いたいという欲求があることが推察できた。これは、いわゆる劇場型／すり鉢型の座席配置が好まれることを意味すると考えられるが、これらは建設後には変更できないため、設計時には、実際に体験してみでの比較等を加え、さらに入念な調査を行う必要がある。

また座席だけでなく、スコアボードや音響・照明といった試合を楽しむための設備も観客に非常に重要視されていることが分かった。琉球キングスの試合において、演出用の照明が使われるのは試合前の選手紹介など限られた時間でしかないが、これらの設備が重要視されていることから、観客は試合だけでなく総合的にエンターテインメントとして観戦していることが推察できる。

### 【新設体育館が常設すべき設備】

座席やスコアボードなど、興行に必須な設備を常設化することにより、大幅なコスト削減が示唆された。またコストだけでなく、設営に掛かる時間も短縮され、常設化による質的向上も期待できる。

一般的に体育館の耐用年数は47年。その間で、どのスポーツがどれくらいの利用をするのか、また近隣にはどの種目を主目的とした体育館が存在するのか、よく調査、検討のうえ常設すべき設備を選択すべきである。これから新しく「観る」スポーツに対応した体育館が建設されることは、通年でスポーツを間近に観戦する機会を創出し、より豊かなアリーナスポーツ文化の醸成に貢献する。体育館の建設を検討する自治体には、真摯に現場を知り、必要な設備の常設化を検討していただきたい。またスポーツ団体も、あるべき施設の姿を研究し、発信し続ける努力が必要であると考えます。

## 【 結論 】

「観る」スポーツに対応した体育館を新設する際は、その主たる利用者を想定し、必要となる座席、スコアボードなどの設備を常設すべきである。